

第1検討部会 会議録

会議の名称	第3回 第1検討部会
開催日時	平成19年8月30日(木) 午後6時6分から午後8時50分まで
開催場所	川口市職員会館 3階会議室
出席者	(部会長) 金井副委員長 (委員) 金子委員、池田委員、落合委員、神尾委員、林委員、宮原委員
会議内容	・川口市史(昭和50年ごろ～現在まで) ・川口市政の特色
会議資料	・川口市史(昭和50年ごろ～現在まで) ・関連統計データ ・市民憲章、まちづくり基本条例に関する資料 ・投票所別投票率の状況
発言内容	■川口市民の投票行動について ・県知事選について、川口市では最近では県下ワースト1位になるなど、投票率が低い。 ・投票率データは市政や自治基本条例を考えるうえで重要である。 ・川口市民にとって県行政・県知事はあまり興味がないのではないかと。川口市の自民党も県とは別に活動していた時期があった。川口市は埼玉県の南端の辺境であり、県政の光は当たらないのかもしれない。 ・自民党が個々に動いているのに対し、民主党や共産党のほうが駅前で組織的に動いているように見えた。 ・民主党は地域よりも駅頭に立って浮動票や無党派層を取り込もうとしているのではないかと。自民党は駅頭に立つのが慣れていないこともあるが、地域をしっかりと考えているのではないかと。 ・かつての自民党は旧住民の支持があった結果、選挙に勝ってきた。最近では新住民が増え、出入りがあり、それらは浮動票となり、駅頭の人で判断するようになった。これらの人は自民党の議員の日頃の取り組みの内容を知らないから、駅頭で活動している顔の見える候補者に投票するのではないかと。自民党は、新住民が4割を占める現在の状況に即応しきれていないのではないかと。 ・一部の候補者の駅前でパフォーマンスが注目されがちではあるが、市民を取り込んだ会議を開催したりと、平行して努力はしており、駅頭だけで選挙活動しているわけではないと思う。 ・市民と議員(または候補者)との会合では以前に来てくれた人が再び来てくれるとは限らない。もっとも、自民党の会合では比較的固定メンバーが集まっているように思う。 ・マンション住民のなかには学歴等の高い人もおり、従来型の選挙活動や地域活動にはなじみにくい人もいます。

■教育について

(最近の状況)

- ・エルザに住んでいる子は頭がいいと、子ども同士のなかでも言われているようである。
- ・元郷地区の児童数は増えている。しかし、小学校は地元でも中学校は都内志向が強く減っているようである。自分のことだけを考えて、市にはあまり関心がないように見える。
- ・マンション住民はローンを抱えている。子どもにはしっかり教育をしないと、親も困るという意識があるのかもしれない。
- ・都内の中学校に通わせたいと思う親は多い。その家庭では仕事も都内であることが多いのではないかと思う。
- ・大学附属小学校に通う子も増えている。
- ・最近マンションに入居した人も後 10 年、15 年もすれば、ローンや子育て、仕事を一通り終える。その結果、政治の動きも変わってくるのではないか。
- ・既に団塊世代がボランティア活動を始めるなど、変化の兆しは見える。

(川口市史)

- ・昭和 56 年ごろに県立高校の増加を求めた歴史がある。当時川口の高専教育の基盤は弱く、高等教育の必要性の認識が、周辺の浦和、大宮などと比べて、それまでは低かったようだ。
- ・川口市が産業都市というのは明快であるが、産業文化都市というのはどのような意味なのか。
- ・どこが文化かは色々あると思うが、文化、教育では遅れているという認識から文化都市を目指すとしたのではないか。
- ・川口では高校を出ても町の中で十分に生活ができる環境にあった。浦和や大宮では両親が学問を受けて、世の中は厳しいという認識から教育を受けると意識が強いのではないか。身近にいる人にも子どもには教育をきちんとつけさせないと子どもが独立していけないのではと危惧をしている。
- ・高校については、男子は県立川口工業高校、女子は市立川口高校（旧市立川口商業高校）に人気があった。
- ・娘さんが地元の信用金庫に就職してくれればと願う親が多かった。
- ・エルザでは、建設業者がローンのことを考えて都内の公務員向けに案内を出して、たくさん入居したと聞いている。

■市町村合併について

(川口、鳩ヶ谷、戸田、蕨 4 市合併について)

- ・事務局の資料では、平成 8 年に 4 市の全市議が政令市を目指して建議書を各市長に提出、と書いているが、全市議ではなかったように思う。
- ・当時は国と交渉して、政令市の人口要件を 70 万人にしてもらおうとしていた。
- ・3 市合併は直前までいったが、市の名前でもめた結果、合併は頓挫した

	と聞いているが。 ・合併には消極的な人もいた。心の中では色々あったようだ。政令市を目指したのは合併の熱を冷めさせないためのものだった。 ・「川口」という名前を残したいという強い気持ちが多く市民にあり、我々も一所懸命に運動して、アンケート結果も一番多かったが、アンケートではずっと下位の方の武南市という名前になったためである。 ・合併の話では、(川口市への)「吸収」は使わず、「対等」で審議会で浸透していった。ということは、「川口」は使えないということを感じていたと思うが、市民が投票した結果、選んだ名前は川口市だった。しかし、協議会では川口という名を使うと対等合併と認識されなくなると考えた結果、武南市案を採用した(市民の投票の前から協議会では対等合併路線の堅持、新しい名前の採択の概ねの合意ができていた)。 ・川口市にとっては名前を変えてまで合併する必要性は低かったのかもしれない。 ・合併が最優先なら名前はどうでもよかったはずである。 ・川口市は合併に前向きだったが、そもそも対等合併に無理があった。当時は国策上合併が推進され世間的にも盛り上がっていたため、表立って合併に反対とは言いにくい雰囲気であったが、本音では議員数や報酬の点で反対の人もいたのかもしれない。 ・対等合併について川口市がどのように考えていたかは、本部会の関心にとっても重要なテーマである。合併のスタンスとして、相手が入ってくるのは構わないが、自分を変えないという意思表示をしたわけである。今回、自治基本条例を作りたいと言うことは、自分の自治のかたちを決めてしまうことだから、「対等合併はしない」という意志表示として理解できる。 ・戦時中の国策で川口と鳩ヶ谷は、昭和 15 年に強制合併し、昭和 25 年に分離した。 ・鳩ヶ谷の方が宿場町として歴史は古く格も高いので、鳩ヶ谷には意地があったのではないか。 ・駅の位置が川口市と蕨市が近接している蕨駅周辺の駐輪などの問題は、かつては川口市としては対応ができなかった。今は両市で協定が出来て対応は変わってきたが、蕨駅東口周辺の投票率が低いわけはよく分かる。川口市の行政があまり及んでいない。 ・芝川も右岸と左岸で市が異なる。 ・川口市外から来た人にとっては、それほど行政区に関心はないかもしれない(鳩ヶ谷では頻繁に合併について住民の意思を聞いているが、川口ではそれほど関心はないように思える)。 ・戸田と蕨は歴史的にも合併しやすいかもしれないが、川口と蕨、あるいは川口と鳩ヶ谷は歴史的に仲がよい。 ・蕨市の塚越のところは川口の芝園と以前は取り替えようという話もあった。 ・戸田と蕨は一部事務組合も共同しているなど、「中仙道行政」といういい方もあるくらいだ。
--	---

- ・当時広報かわぐちでは大々的に合併を特集していたし、一般市民にとっては合併が進んでいるものだと思っていた。しかし、突然に頓挫した後は、非常に簡単な説明しかなく、説明不足だったと思う。
- ・4市の協議会の意思決定は2/3ルールだったが、名前だけは過半数で決まった。
- ・戸田が抜けたとき、もう合併はないと思ったが、国策で合併しろと言っていた。戸田が抜けても対等合併から吸収合併に方針転換できなかった。ちなみに「武南」といったら今の川崎市あたりのことを指すと思う。「武蔵の国の南」ということから、川口のあたりで使われている「武南」には意味はないと思う。

(鳩ヶ谷との合併について)

- ・鳩ヶ谷は川口と合併したいのか。
- ・鳩ヶ谷市民の多くは川口への合併を望んでいる。この場合は川口への吸収合併ということになる。
- ・鳩ヶ谷では川口にお金があるから合併すればいろんなことができると伝わっているようである。
- ・鳩ヶ谷市議には由緒ある家系の人が多い。議員であることが名誉職と思われているところもあるかもしれないがそうであれば職を失うことになる合併は考えない。しかし、合併といわないと市民から支持されない。本音のところでは合併したくないのではないか。
- ・お金の話をすると、「川口」という表示をかえるだけで、多額の金額がかかる。
- ・鳩ヶ谷では吸収でもいいと思っているのではないか。
- ・私見として分かりやすい喩えを使うと、鳩ヶ谷との合併は出ていったせがれをまた抱えますかという問題である。

■川口市政について

(公金支出について)

- ・平成10年に監査請求する市民が出てきたことには注目したい。
- ・川口のオンブズマンはここからきていると思う。
- ・昭和51年には歳入歳出外現金の問題がかなり注目された。
- ・新住民が増えてきて、公金支出への目が厳しくなった。これまでは仲間同士の感覚でやってきた行政が変わってきた。自治会などの会計報告の仕方なども、これまではなানাあで済んでいたものが、高学歴や会社経験のある新住民・マンション住民からすると、不十分に見えることがあるようだ。
- ・鋳物業者への融資についてはあまり世間的に注目されてきたわけではない。こげついているわけでもない。
- ・鋳物屋が倒産する例はほとんどない。融資など活用して、不動産管理業や商社にうまく転換できた。最近では商社部門の経営は厳しくなっているが、マンション等の不動産管理は順調である。
- ・鋳物工場は海外移転するところもある。平成不況を乗り越えた業者は技

	術的にも優れているが、技術・技能伝承という課題も出てきている。 (まちづくり基本条例について) ・まちづくり基本条例の背景も知りたい。マンション問題が背景にあるのか。 ・川口は産業を残したい、ものづくりの町は下ろせない、マンションの増加と従来のものでとの共生が難しくなったことから条例をつくったのではないか。 ・まちづくり条例を制定しても、あまり効果はなかった。住工混在のままにしておくのは、マンション住民からの反対が強かった。 ・ニセコ町では、自治基本条例を「町づくり基本条例」とよんでいる。 ・川口市まちづくり基本条例も、新旧住民の交代を背後に睨んだ自治のかたちを想定しているので、自治基本条例の体をなしている。その意味では、川口市には古くから先進的な自治基本条例があった。これをもとに改正という形で自治基本条例を制定してもいいと思う。 (今後の市政について) ・これまでの総合計画のコンセプトは依然として鑄物のまち、ものづくりのまちというところが中心的な発想になっているように感じる。戦後合併された安行、戸塚という農業が主力で、自然が残っている地域への配慮が弱かったと思う。今度の基本条例ではどう考えるか。 ・戸塚・安行は緑の地域である。 ・現在の総合計画の将来都市像には「緑 うるおい 人 生き生き」という文言が入っている。 ・そういう意味では、地域間のバランスをとっているのだろう。 ・鑄物の技術は貴重な遺産だ。これがどう継承されていくか心配である。 ・バブルを乗り越えた企業はグローバルなところが残っており、影響力は残るのではないか。 ・鈴木文吾さんの聖火台のレプリカはご自分が磨いていると聞く。こうした川口の人材をなぜもっと大事にしていけないのか。 ・聖火台が鑄物である必要性はあるのか。 ・鑄物である必要はないが、当時の力関係のせいではないか。全国的にもそれだけ力があつたということ。 ・荒川上流(大滝村)の子どもと下流(川口市)の子どもの交流活動をしたとき、鈴木さんの作ったものが大滝村にもあることに縁を感じた。 ・ものづくりもよいが、人づくりも守っていききたい。 ・スポーツが非常に盛んなところも残していくべきだと思う。東京に比べて施設等は恵まれている。 ■今後の進め方 ・川口市政をよく知る人にインタビューしたい。例えば、永瀬前市長、マンション管理組合の人、文教関係で例えば前教育長、環境関係のNPO、市民オンブズマンなど。
--	--

	■ その他 ・回収率が低かった平成 8 年のまちづくりアンケートでは何をどのような方法で聞いたのか。 ・昭和 58 年の住民によるマンション協議会の内容についても知りたい。 ・昭和 59 年に市が発足させた公民館見直し研究会が知りたい。
次回以降日程	・次回は 9 月 6 日 18 時から、次々回は 9 月 19 日 18 時から。